

【研究論文】

教師教育における模擬授業指導の現状と課題（Ⅰ）

広島文教女子大学人間科学部

初等教育学科 准教授 佐伯 育郎

初等教育学科 教授 徳本 達夫

はじめに —問題の所在と対象—

小文は、地方の小規模私立女子大学である広島文教女子大学（以下、本学）における教職課程教育の一環として実施されている、小学校教育実習の事前指導としての模擬授業指導の現状と課題を示す。これによって、質の高い教師教育を目指す手がかりを得ることが目的である。

本学における大学教育と教職課程教育の総体の一端は、学生が取り組む模擬授業の際にも現れる。（全体像は後述する。Ⅱで提示）。それは、個別具体的な本学における大学教育と教職課程教育の成果であると共に本学教育が取り組むべき課題でもある。

以下、模擬授業指導に関わる基本原則、実施の全体像、模擬授業のひとつである図画工作科の事例を示し、模擬授業指導の現状と課題を明らかにする。読者各位の忌憚のないご批評を賜りたい。なお、本稿では、筆者らが共同討議を重ねて分析作業を繰り返したが、文責については末尾に記した通りである。（徳本）

I 模擬授業・教職課程教育・大学教育

1. 授業の5つの柱

結論的にいえば、模擬授業指導を通して、教職課程教育にとどまらず、本学教育の総体が露わになる。なぜなら、一般に授業の構想・実施・評価の全面にわたって問われてくるのは、授業を実施する際の柱である、教材研究、子ども研究、指導法研究、自己研究、時代・社会研究の5つの内実が明らかになるからである。模擬授業では、指導力の育成だけを図るのではない。学生がこれまでの学びで獲得してきた基礎学力・応用力等、以上の5つの柱に関わる能力を総動員して模擬授業に当たる。したがって、これらの全般にわたって本学がどこまで学生の資質能力の形成を図ってきているかという問いとなって教員と学生の前に明らかになる。

この5つの柱は、教育実習指導のひとつとしての模擬授業指導だけでは実現不可能な総合的で高度な次元の学びである。それゆえ、本学の大学教育と教職課程教育がどこまでこれらの観点から学生の指導に意を用いて展開されているか、徹底的な自己点検と自己評価が必要となる。そこから大学教員として、この事実と誠実に向き合い、学生と共に教職がもつ社会的な責任を果たす職務を遂行することを以って、来るべき教育実習、ひいては教職従事者・社会人として教職課程履修者としての責任を自覚することをめざすこととなる。短期的には教育実習先の児童生徒と教員・保護者・地域に対する責任として、長期的には国民全体に対する社会的な責任として、優れた専門家としての資質能力の形成・向上を図ることをもって第一義の指導目標として実施していくことが必要となる。

短期的な視点からだけの指導に傾斜することは、結果的に質の高い教育実習指導を生まない。いわ

んや質の高い大学教育・教職課程教育を生まない。それゆえ、現実的に実習校における実際的な総合的な指導に依拠することになる教育実習の事前指導において、総体としての大学教育・教職課程教育の質の点検の一環として模擬授業指導を重点的に位置づけたい。実習後の事後指導においても、上記と同様の観点から総体としての大学教育・教職課程教育の質の点検も徹底的に行うこと、さらには卒業年次後期の教職実践演習で最終的な総括的な指導を行うことが今日的な教職課程教育担当者としての課題となる。

2. 参考材料としての大学授業

授業を実施するうえで柱になる、先の5つの観点は、大学授業でも実施されていることが前提となる。その意味では、学生にとって模擬授業を考える上での検討材料の一つが大学授業である。

学生たちが小・中・高校時代にどこまで授業を対象化できていたか。実態は多様である。批判読みの学習を行っていた児童生徒であった学生にとっては、授業を批判的に対象化することを通して、質の高い授業づくりに取り組むであろう¹⁾。そこでは、教員と児童生徒関係は固定的ではなかったであろう。当然、大学授業の受講姿勢は批判的な学び方であろう。受動的鵜呑み的ではないはずである。他方、教員と児童生徒関係が固定的であった場合は、小・中・高校時代の学生はより生徒化された受講姿勢であったであろう。それゆえ、前者は模倣対象としての授業であり、後者は乗り越えるべき対象としての授業である。両者の差は大きい。それゆえ、大学授業は教員と学生関係を固定化せず、真理探究の同志的關係、子どもの最善の利益保障をめざす仲間としての、主体と主体との呼応関係を生きる存在として関わる必要がある。

最終的に模擬授業に取り組む指導を通して、学生はどこまで成長を遂げたか。高等教育機関の教員として、学生における真理探究の自覚と力量形成にどこまで寄与できているか、教員自身はどこまで真理探究の学徒であるか、という問いを学生と共有することである。そのような姿勢が実践力の形成にも繋がる。

入学当初の学生のなかには、授業とは知識伝達であり、自分よりも小さな子どもにいかに分かりやすく教えるかが授業の目的であるという理解をする者がいる。知識は周辺にあまねく存在する時代であって、知識基盤型社会において必要なのは断片的雑多な知識の集積ではない。人類的・現代的な課題解決に必要な知識の収集力・活用力・総合力・分析力等である。PBL (Problem Based Learning, 課題解決学習) や主体的学習 (active learning) が喧伝されるゆえんである。授業を構成する要素を根本の部分から探求するような学びを通して、知識伝達としての授業を超える自覚と力量をいかに育てるか。大学教員の授業の見直しが要請される。

3. 模擬授業指導担当者の課題

以下、叩き台とする模擬授業指導の現状と課題は、本学初等教育学科 (以下、本学科) の8名の担当者によって実施される模擬授業指導の総体としてのそれである。現状と課題は、毎年、授業実施後の成績評価会議において検討され、課題が共有されてきた。しかし、まとまった形での報告は今回が初めてである。本報告を契機に、本学における教職課程教育の質保証の実質化に向けての一里塚になることを期して本小文は為された。筆者2名は非力ながらそのための叩き台である。

担当者として求められることは、学生の授業実践力の基礎の形成と向上に繋がる指導の徹底である。その前段階としての模擬授業指導である。ここでいう、授業実践力・教育実践力とは、最終的に教育の力によって理想の実現をめざそうとした戦後教育の初志の実現でもある。その意味では、結論的にいうと「歴史的現在」を生きることには自覚的でない者は、次世代の前には立つべきではないだろう。模擬授業学習を通して自覚することが期待されることは、次世代に対する教え方の学習の練習ではなく、時代や社会の中に生きる一人の個人として、「歴史的現在」をどのように生きることが現在を生きることの責任を果たすことになるのかを協働性と同僚性を発揮しながら、より質の高い省察性に励む教職課程履修者になり続ける自責の形成である。中央審議会答申がいう、めざすべき教員像に倣っていえば、国民全体に奉仕するという教職の社会的責務を自覚した、自ら学び続ける教員像がここで

言う教員像に相当するであろう。

本学では教育実習Ⅱ・Ⅲの事前学習の一環として学生個々が実習に取り組む上での自己目標を記載する。既習の教育実習Ⅶ（観察実習）の学習成果と課題を踏まえ、教職志望動機と理由とを深く自己に問う形で書くことを求めている。対象化作業は自己直視を生む。結果として、「教員ごっこ」「授業ごっこ」としての教育実習でない、模擬授業でもないことをどこまで体感的に理解しているかが行間からにじみ出る。それはまた、大学教員の授業や生活からにじみ出る教員の生き方でもある。（徳本）

Ⅱ 教育実習Ⅰ指導の全体像

1. 初等教育学科2～3年次の教育実習指導の概要と特色

本学科の小学校・教育実習には、次の3つがあり、それぞれに異なる形態・意義がある。2年次前期の「教育実習Ⅶ（観察・参加実習）」、3年次前期の「教育実習Ⅰ（模擬授業）」、3年次後期の「教育実習Ⅱ・Ⅲ（本実習）」である。

実習の名称・単位	開講時期・実習校	授業コマ数・実習期間	備考
教育実習Ⅶ（観察・参加実習） 選択履修 1単位	2年次 前期	15コマ分	教育実習報告会 内諾訪問ガイダンス
	6月（広島県内協力校）	1週間	
教育実習Ⅰ（模擬授業・事前 事後学習）小免必修 1単位	2年次 1～2月	1コマ分（オリエンテーション）	教育実習事前ガイダンス
	3年次 前期	16コマ分	
教育実習Ⅱ・Ⅲ（本実習） 小免必修 4単位	3年次 後期（出身校など）	20日間（4週間）	教育実習報告会

【表1：初等教育学科2～3年次の教育実習】

本学科が育成を目指している実践力のある逞しい教師になるためには、教科に関する科目、教職に関する科目などを履修し、教師としての専門的な知識や技能を修得することが必要である。それに加え、小学校教育に関する実習の場を通して、実践的指導力を身に付けておくことも不可欠である。この力を身に付ける機会が、3つの教育実習である。

教育実習指導の特色は、①省察性（教育実習報告会の開催、教育実習報告書・報告会振り返り冊子の作成、自己評価の実施）②協働性（模擬授業や教育実習報告会などにおけるグループでの学習）③同僚性（グループでの支え合い・学び合い）④段階性（分散・積み上げ方式の教育実習）⑤主体性（3年次の夏期休業中に行われる模擬授業、学生主体の教育実習報告会）⑥総合性（教育実習報告会での情報交換を通して、お互いの学びを相互に取り込む）である²⁾。

以下、平成27年実施の教育実習Ⅰの実際について報告し、模擬授業指導の意義と実際について考察する。

2. 教育実習Ⅰの概要

教育実習Ⅰは、教育実習Ⅱ・Ⅲのための事前指導であり、小グループで教材研究や模擬授業に取り組むものである。本実習に臨むに当たり、実習生としての確かな心構えと教育実践力を養うことをねらいとする。前年度に終えた観察実習（教育実習Ⅶ）の体験、各教科教育法の学びをふりかえり、教材研究や学習指導案作成の仕方などをより深く学習する中で、事前に取り組むべきことを明確にする。小グループに分かれてからは、教材研究・教材開発、模擬授業に取り組む。授業外の時間を活用して、模擬授業に関する担当教員との打ち合わせを行い、指導を受ける。本実習終了後は、実行委員会を中心に教育実習報告会を企画・運営・実施し、学習のまとめとする。到達目標は、以下の通りである。

- ① 各教科・領域の復習，参考資料の収集，指導技術・指導法についてのレポート課題に取り組み，基礎をかためる。
- ② 各教科・領域の学習指導案について理解し，自分で書くことができる。
- ③ 教材研究・教材開発に取り組み，教材・教具なども準備することができる。
- ④ 学習したことを活かして，授業者・学習者として模擬授業に取り組むことができる。

教育実習Ⅰの具体的な学習計画（講義概要）は，次の通りである。

講数	(実施時期) 学習内容
0講	(2月上旬) 教育実習Ⅰオリエンテーション……趣旨説明，グループ決めなど
1講	(4月) 全体会……春休みの課題の提出，各教員からの諸連絡・激励，ループリックの説明など
2講	全体会……教師による示範授業，今後の取組みについてなど
3～8講	第1クール 模擬授業Ⅰ～Ⅲ・第2クール 模擬授業Ⅰ～Ⅲ（Ⅲで中間の振り返り）
9講	4年生との「実習報告会」引き継ぎ会
10～13講	第3クール 模擬授業Ⅰ～Ⅲ・第4クール 模擬授業Ⅱ～Ⅲ
14～15講	代表者による全体研究授業Ⅰ・Ⅱ
16講	全体会……教師による総括・激励，教育実習Ⅰの振り返り

【表2：教育実習Ⅰ（小学校）実施計画】

0講では，担当教員から授業の趣旨や春期休業中に取り組む課題についての説明を受け，グループ決めを行う。春期休業中の課題には，教育に関する文献を用いたレポート作成，学習指導案・選考実践例の収集の他，2年次の各教科教育法についての復習も含まれる。例年，8グループに分かれて各教科領域の模擬授業に取り組む。学生数にもよるが，1グループ7～10人である。自身の専修では，その教科の模擬授業を体験している場合が多い。学生は，自身の専修の教科が含まれていない方のグループに属する。グループ決定後，代表者・副代表者を選出する。グループの目標，担当教科領域や模擬授業の順番なども決める。

1～2講では，各教員からの諸連絡・激励，代表教員による示範授業などを行う。1講もしくは2講では，ループリックを学生に配付し，評価規準（基準），評価方法についての説明を行った。2講の代表教員による示範授業では，教科指導のあり方，教材研究の仕方，模擬授業・協議会の進め方などについて具体的に学ぶ。平成27年度は，理科と道徳の示範授業を実施した。

3～13講では，グループ別に教師役と児童役に分かれて学生主体で模擬授業をする。教員も，児童役として参加しながら，学生の評価を行う。模擬授業終了後，協議会を行い，成果と課題を明らかにする。第1～4クールで，家庭科を除く8教科・道徳の中から4教科・領域の模擬授業を行う。学生1人につき，3教科・領域を担当する。模擬授業を行う数週間前から，学習指導案の作成，教材・教具の準備，板書計画の作成などの教材研究に各自で取り組む。事前に各教科領域の担当教員と相談し，授業化する教材の選択，対象学年の選定，学習指導案の作成，授業の進め方などについて話し合いを持つ。空きコマや放課後など，授業外での活動が多くなる。平成27年度では第2クールⅢ（第8講）において，模擬授業終了後にグループ毎に中間での振り返りを行い，第1・2クールの成果と第3・4クールに向けての課題を確認した。

教育実習Ⅰでは，15分間の模擬授業と15分間の協議会を行う³⁾。授業者の学生は，教員として授業を行い，他の学生は児童役となる。協議会では，授業者自身の反省・振り返り，質疑応答，担当教員による助言などを行い，感想・意見を交流する。

14～15講では，2回にわたり代表者による全体研究授業を行う。学生自身の立候補，担当教員の推薦により代表者を決定し，2グループに分かれて模擬授業を行う。例年，4人が代表者として授業する。全体研究授業では，45分間の模擬授業とその後の協議会を行う。今年度は，立候補者が2人，教員による推薦者が2人であり，授業者選出は難航した。

16講では，授業全体の振り返りとまとめをする。担当教員からの気づき，激励の言葉などを通して

後期の教育実習Ⅱ・Ⅲに向けて意識化を図る⁴⁾。

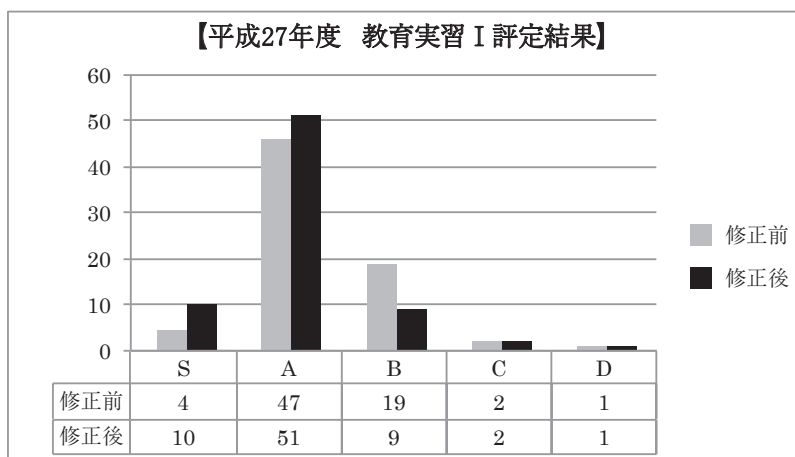
グループ (人数)	第1クール (3回)	第2クール (3回)	第3クール (2回)	第4クール (2回)
A (9人)	国 語	音 楽	理 科	体 育
B (8人)	音 楽	国 語	体 育	理 科
C (8人)	理 科	体 育	国 語	音 楽
D (9人)	体 育	理 科	音 楽	国 語
E (10人)	社 会	図 工	算 数	道 徳
F (10人)	図 工	社 会	道 徳	算 数
G (10人)	算 数	道 徳	社 会	図 工
H (10人)	道 徳	算 数	図 工	社 会

【表3：教育実習Ⅰ（小学校）グループ・模擬授業一覧】

3. 教育実習Ⅰの評価・評定

教育実習Ⅰは8人の教員が担当する（表3）。平成26年度から、評価・評定のための共通の指標となるルーブリック（授業評価票）を導入することになった。卒業論文指導などを中心として、ルーブリックによる評価の導入・活用が本学では進んでいる。このルーブリックに基づき、8教科領域の模擬授業の評価・評定を8人の教員が行っている。平成27年度では、ルーブリックを部分改訂した。このルーブリックを開発した今崎浩は、「目標に準拠した評価を行うために、評価規準と評価基準を示した評価指標に基づく評価」とルーブリック評価を定義している⁵⁾。評価がどのように行われるかを評価者・被評価者が共有すること、評価を公平・厳正に行うこと、評価結果を学生にフィードバックすることを意図したものである。評価の観点は、教材分析力、授業構想力、教材開発力、授業展開力、表現技術の5点であり、さらに小項目に分かれている。

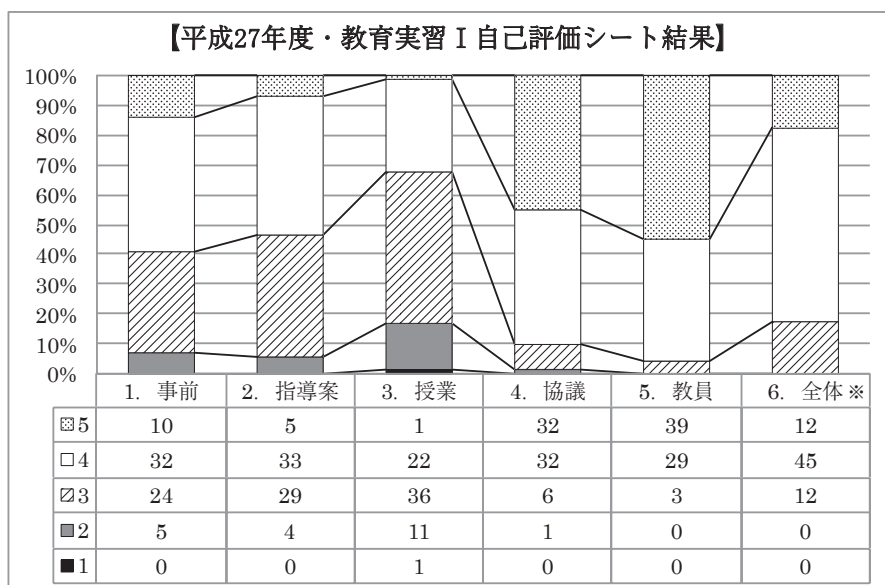
教育実習Ⅰの平成27年度の評定はグラフのようになった。A～Dグループの採点を国語、理科、音楽、体育の4人の教員が行い、E～Hグループの採点を算数、社会、図画工作、道徳の4人の教員が行う。採点后、Microsoft Excelで作成した評価票に点数を入力・統合したものが修正前である。平成27年度では、教員が使用する評価票も、昨年度の個人別だったものからグループ別に改善し、入力・閲覧しやすい形式に変更した。8人の担当教員による協議の上、取組の状況を考慮して最終的に評定を決定したのが修正後である。学生に対する最終的な評価・評定は、ルーブリックの結果そのままではなく、評定の境界に位置する学生については、教員による微調整を加えることによって修正した。具体的には、取組の状況が良好であり、5点以内のところの評定を一段階上げることができそうな学生についてのみ調整を行った。



【資料1：平成27年度 教育実習Ⅰの評定結果】

4. 教育実習 I 全体の成果と課題

最終講において、自己評価シート（A 4サイズ1枚の質問紙）の記述による調査を行った。調査対象は、教育実習 I 受講者71人（2人欠席）である。「模擬授業への取り組み、グループでの協議会等について、自己評価しましょう。各自の個人的な反省やグループ全体についての反省、教育実習 I についてなど、率直に感じたことや思ったことを書きましょう。」として、1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み、2. 指導案の作成、3. 自分の授業、4. グループでの協議の仕方、5. 各担当教員の指導、6. 全体を振り返って（自分の取り組みや今後の課題、教育実習 I についての今後の要望等も書きましょう。）の6観点についての満足度を5段階（5が最高、1が最低）で評価させた。結果はグラフ1の通りである。3. 自分の授業に対する評価が最も低く、5. 各担当教員の指導が最も高い結果となった。1人のみだったものは、3. 自分の授業への5点、3. 自分の授業への1点、5. グループでの協議の仕方への2点であった。



【資料2：教育実習 I の自己評価シートの集計結果】 ※記入漏れ2を除く

各項目の評価の理由には、次のような回答があった。以下、代表的な回答を抜粋する。

1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み
 - ・（5の学生）指導案や、はじめて使うICT教材の研究をして当日に備えた。模擬授業も行うことができた。（Bグループ）
 - ・（2の学生）教科書の確認や教具の準備など、もっとしっかりやっておけばよかったと思った。（Fグループ）
2. 指導案の作成
 - ・（5の学生）何度も先生方に添削していただいて良い質のもののができたと思う。実際に実習とか現場に出て、自分で作成できる力を身に付けたい。（Fグループ）
 - ・（2の学生）3教科とも、2週間前までに指導案を提出することができなかった。それぞれ先生によって書き方の好みがあるため、難しかった。（Hグループ）
3. 自分の授業
 - ・（5の学生）実習で行ったものについては、15分だけということもあって、かなり満足している点が多い。これで満足せず、次も頑張りたい。（Eグループ）
 - ・（1の学生）自信のなさや緊張しやすいこと、児童の様子に目を向けることができていることなど、たくさんの課題が見付かった。どうやってこの課題を突破していくか、考え、行動したい。
4. グループでの協議
 - ・（5の学生）毎日全力で参加できた。良い所は褒め、また改善点は「自分なら～のようにする。」とアドバイスにつなげることができた。（Dグループ）
 - ・（2の学生）初めの国語では形式通りの方法で進んだが、それ以降は少し違う方法になっていた。協議の内容はと

でも興味深かったが、発言をよくする人とあまりしない人に分かれていたような気がした。(Aグループ)

5. 各担当教員の指導

- ・(5の学生)先生方は、上からものを言うのではなく、私たちに足りない所や痛い所をつっこんでくれました。でも、努力した点を否定せず、褒める所は褒めてくださり嬉しかったです。(Fグループ)
- ・(3の学生)適切なアドバイスをくださったおかげで、新たな視点・考え方を知ることができた。学生のやり取りを聞いて、間で助言する言葉をかけてくださる先生が特にありがたかった。(Aグループ)

6. 全体を振り返って

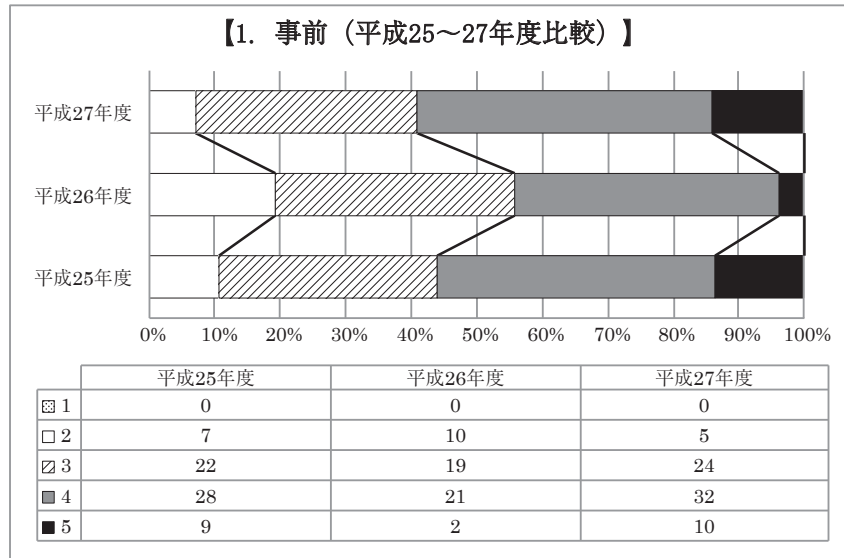
- ・(5の学生)自分で行った授業、他の子が行った授業などからたくさん得るものがありました。私は、児童の発言を大切に、その発言で授業を進めていきたいと思っているので、その対応が上手な人の授業を参考にしていきたいです。また、協議会で深め合った内容で、自分の行った授業をもう一度考え直したいと思います。臨機応変な対応のできる教師になれるよう、いろいろなパターンのことを考えておきたいです。(Cグループ)
- ・(3の学生)先生に最後「今年はチャレンジャーが少なかった」と言われたのが、すごく印象的でした。私は全体模擬授業を自分の力量を考えてやりませんでした。忙しいということもあったけど、最初の段階から計画しておけばチャレンジャーになれたのではないかと考えました。実習に行った際は、計画性をもって一つずつこなしていきたいと思います。私の過緊張もしっかりと直していきたいです。(Eグループ)

以上のアンケート結果をもとにしつつ、平成27年度における教育実習 I 全体の成果と課題をまとめると次の5点になる。

- ① 担当教員は、ルーブリックとその活用に少しずつ慣れてきた。
- ② 学生に対する評価・評定は、ルーブリックの結果そのままではなく、教員による微調整を加えることによって最終的に決定した。
- ③ 全体研究授業の授業者選出が難航した。立候補者は2人、教員による推薦者が2人であった(昨年度は、4人とも学生による立候補)。3年次前期は、他授業での課題も山積しており、学生の負担が大きかったことが一因であろう。
- ④ 教員による推薦ではなく、学生主体による立候補者が常時出てくるのが理想的である。
- ⑤ 中間地点での模擬授業の振り返りを行ったが、特に記録には残していない。模擬授業後半に向けての意識を高めるために今後も継続していくとともに、ワークシートなどに記入させることによって記録に残す必要がある。(佐伯)

Ⅲ 過去3カ年の学生による自己評価結果の比較検討

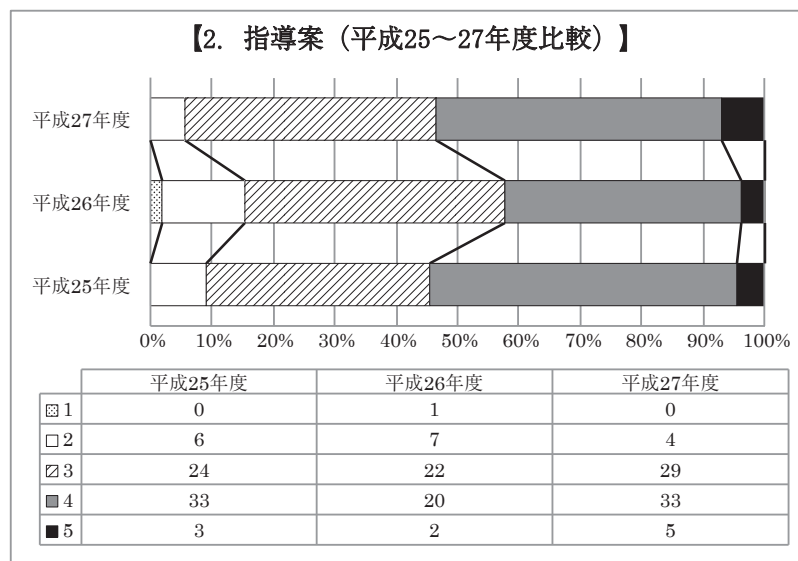
自己評価シートの調査結果を、平成25～27年度の3カ年について比較検討を行った。この3カ年は、教育実習 I が大きく変化した時期であった。平成25年度では、まだルーブリックを導入していなかった。1グループの人数は8～9人であった。1人につき3教科領域の模擬授業を実践した。平成26年度では、ルーブリック評価を導入した。この学年(初等教育学科32期生)は、教育実習 I を履修する児童教育コースの学生が例年より少なかったため、1人につき4教科領域の模擬授業を実践することができた。1グループの人数も6～7人であった。平成27年度では、先述の通り部分改訂してルーブリックを活用した。1人につき3教科領域の模擬授業を実践した。1グループの人数は8～10人であった。



【資料3：教育実習 I の自己評価シートの集計結果（事前準備・教材研究）】

1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み

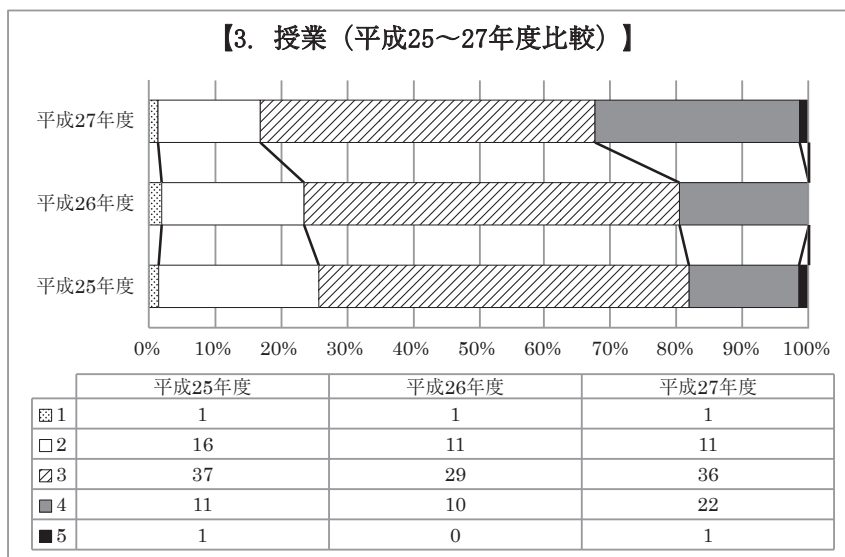
事前の取組に関しては、平成26年度の評価がやや低い結果となった。平成26年度では2と回答した学生が19%となっており、2の割合が10%だった平成25年度、7%だった平成27年度に比べると多いことがわかる。平成26年度では、4教科領域の模擬授業を実践したこともあり、教材研究が重なり、多忙になったため、学生への負担が大きかったのではないかと推察する。



【資料4：教育実習 I の自己評価シートの集計結果（指導案の作成）】

2. 学習指導案の作成

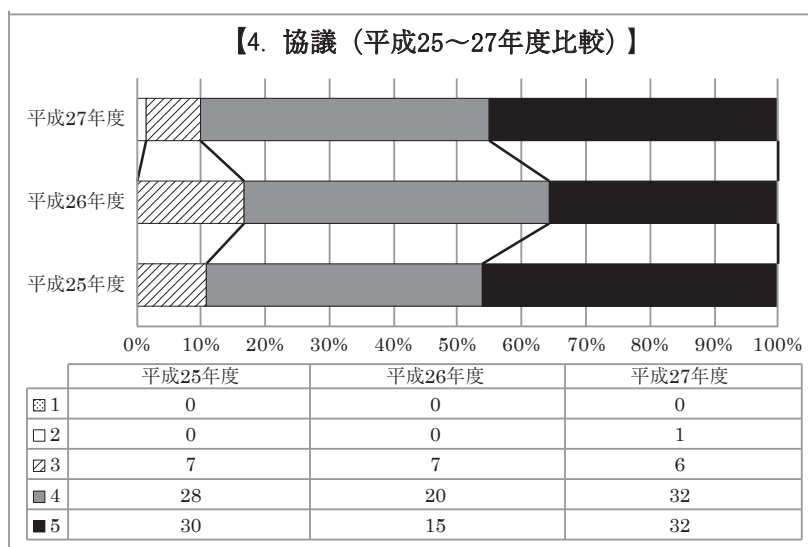
学習指導案の作成についても平成26年度が低い。1と回答した学生が1.9%いる他、2についても平成25年度が9%、平成27年度が5%に対して、平成26年度は13%と高いことがわかる。



【資料5：教育実習Ⅰの自己評価シートの集計結果（自分の授業）】

3. 自分の授業

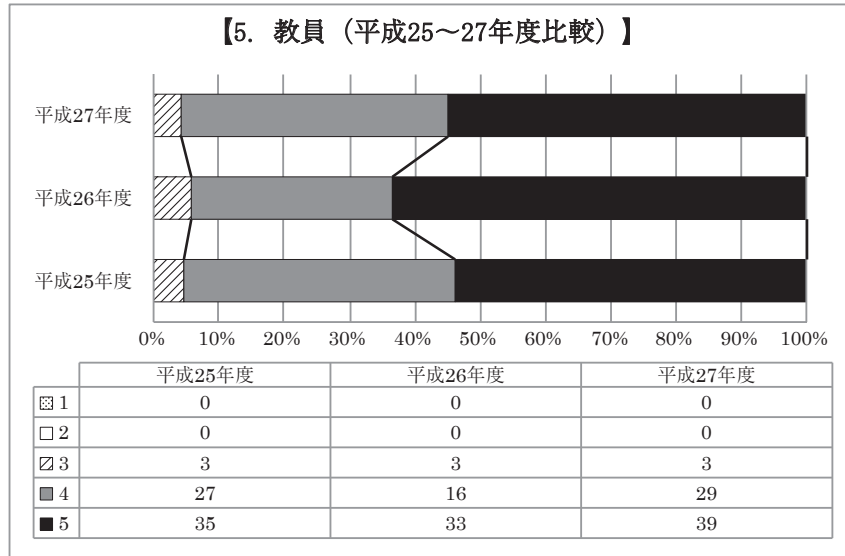
自分の授業については、5と回答した学生は平成25・27年度ともに1人であり、平成26年度にはいなかった。4と回答した学生は平成27年度が30%と最も多く、次いで平成26年度の19%、平成25年度の16%となっている。学生の自己肯定感が低いととれるし、省察性が高い結果とも言えるだろう。3～4回の授業で満足いく結果にはならないのは、むしろ当然であろう。今回の課題・反省を、教育実習Ⅱ・Ⅲで生かして欲しいと考える。



【資料6：教育実習Ⅰの自己評価シートの集計結果（グループでの協議）】

4. グループでの協議

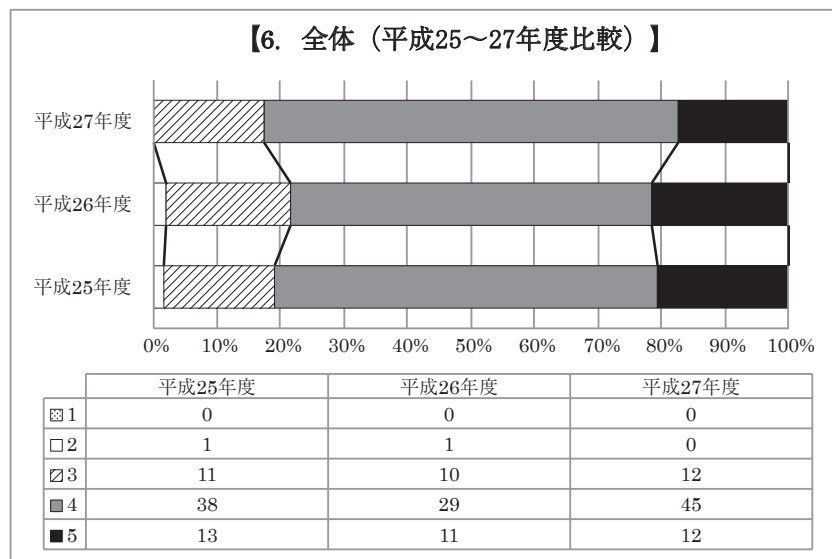
グループでの協議については、5と回答した学生は平成25年度は46%、平成26年度は35%、平成27年度は45%となっている。全体的に見ても満足度は高いと言えるが、3と回答した学生は、平成25・27年度とも4%だったのに対して、平成26年度が7%と最も多かった。平成27年度のみ2と回答した学生がいた。グループの人数が多いと、満足度の低い学生が出てくるといえる。



【資料7：教育実習 I の自己評価シートの集計結果（担当教員の指導）】

5. 各担当教員の指導

1や2と回答した学生はおらず、全体的に満足度は高いようである。5と回答した学生は平成26年度が63%と最も多く、次いで平成27年度の54%、平成25年度の53%（出席者中、未回答が1人）となっている。平成26年度は学生数が少なく、1グループの人数も6～7人であったため、指導案の添削や協議会での講評にも1人の学生につき時間をかけて行うことができたことに起因しているのではないかと考えられる。



【資料8：教育実習 I の自己評価シートの集計結果（全体を振り返って）】

6. 全体を振り返って

平成27年度（回答率97%）では、平成25・26年度と違い2と回答した学生は見られなかった。5と回答した学生は平成26年度（回答率96%）が21%と最も高く、次いで平成25年度（回答率96%）の20%、平成27年度の17%となった。4と回答した学生は平成27年度が65%と最も高く、次いで平成25年度の60%、平成26年度の56%という結果となった。3年とも総じて満足度は高かったが、2以下の回答がないことから平成27年度が比較的高かったといえるのではないだろうか。

比較した結果をまとめると、次の5点となる。

- ① 学生自身の模擬授業に対する評価は比較的 low、教員による指導の評価は高い傾向にある。
- ② 模擬授業の教科数が多いと多忙になり、自ずと事前準備、学習指導案の満足度は低くなる。
- ③ 授業数が多いと、力量の低い学生にとっては負担感になり、力量の高い学生にとっては達成感につながる。
- ④ 1 グループの人数が多いと、模擬授業後の協議の満足度が低い学生も若干見られるようになる。
- ⑤ 教育実習 I 全体の満足度は、年々少しずつではあるが高くなっている傾向にある。グラフだけでの判断は難しいが、ルーブリック導入もその一因か。今後、検討を続けたい。(佐伯)

IV 図画工作科における模擬授業指導の実際

1. 図画工作科の本質

模擬授業についての考察を行う前に、筆者の図画工作科に対するとらえ方について述べておく。角屋重樹・雲財寛は、教科のとらえ方として「教科は文化の伝承と伝達、創造にもとづく活動であるため、教科は文化あるいは既存の学問に依拠する」⁶⁾と述べている。同書では、各教科の本質としてまとめた表の中で、図画工作・美術科の本質は次のようになっている⁷⁾。

教科名	働きかける対象（対象への働きかけ）	獲得するものあるいは目指すもの
図画工作・美術科	形や色彩、材料、光その他の造形要素を使った「みる・かく・つくる」	造形リテラシーや豊かな感性・豊かな情操の獲得

【表4：図画工作・美術科の本質】

これは、三根和浪の考えによるものであり、図画工作・美術科で育成する人間性を「①『みる・かく・つくる』行為において、人の指図でない自己判断・自己決定を繰り返すことによって個性的・個別的になったり自己肯定的になったりする側面、②みる行為において他者の感じ方や見方、それらを支える個別の理由を知ることに於いて、多様性を理解したり受容的な態度になったりする側面、などがある。」と示している。図画工作・美術科で育てる人間性については、次のように示している⁸⁾。

教科名	各教科で育てる人間性
図画工作・美術科	① 個性的個別的な自己決定・自己判断 ② 多様性を理解・受容する態度

【表5：図画工作・美術科で育てる人間性】

三根の考えに対して大筋同意できるが、筆者は2つの点で異論を持っている。1点目は、自己判断・自己決定を強調することで図画工作科におけるアートの側面は説明できるとしても、デザイン的な側面は補足していないのではないかということである。図画工作科は、主観的な側面が強い「絵や立体に表す」分野（非機能的な心象表現）とともに客観的な側面が強い「工作に表す」分野（機能的な適応表現）も大切である⁹⁾。2点目は、三根の考えでは角屋・雲財が述べる文化・学問に依拠するという部分を補完できないのではないかということである。筆者は、たとえ小学校段階での図画工作科でも、児童の発達段階を踏まえつつ、社会におけるアートやデザインといった視点を持って指導することが教師には求められていると考える。

図画工作科	
アートとデザインを基盤・土台とした教科	アートとデザインの基盤・土台となる教科

【表6：筆者が構想する図画工作科のとらえ方】

そこで、先出の表4・5を筆者なりに改訂すると次の表7・8になる。図画工作科の模擬授業をする上でも、アートとデザインという2側面を大切にしながら学生に指導をしている。

教科名	働きかける対象（対象への働きかけ）	獲得するものあるいは目指すもの
図画工作・美術科	アートとデザイン， およびその構成要素	アートとデザインに対するリテラシーの獲得

【表7：筆者が構想する図画工作・美術科の本質】

教科名	各教科で育てる人間性
図画工作・美術科	① 個性的個別的な自己決定・自己判断 ② 多様性を理解・受容する態度 ③ 社会・他者からの要求に応じて行う問題解決

【表8：筆者が構想する図画工作・美術科で育てる人間性】

2. 図工授業力を育成するための4段階

筆者は、図画工作科の授業を実践するために必要な資質・能力を「図工授業力」と定義している。図工授業力は、図工的教養（能力）と授業実践力（資質）の2側面から成り立っていると考えている¹⁰⁾。図工的教養と授業実践力を兼ね備えた教師を「図工授業力のある教師」として自分なりに定義し、4年間の授業を通してその育成を構想している。

図工授業力	
図工的教養	授業実践力
教科に関する専門性	教育に関する専門性
能力	資質
図画工作科・アートとデザインに関する知識・技術， 教材研究・題材開発する力	コミュニケーション能力，プレゼンテーション能力， 児童を支援・指導する力

【表8：筆者が構想している図工授業力】

筆者のこれまでの実践的研究を通して、以下の表のように4段階で図工授業力のある教師の育成を構想した。表の各授業や学外における教育実習との有機的なつながりについても学生に意識させている。授業の初回・最終回などで、次の授業や教育実習とのつながりについて意識させている。近い将来、次の段階に進み授業者の立場になること、その段階はすぐに来ることを意識化している。この4段階における学びの流れは、概略次の通りである。

1年次前期の図画工作が学習者の立場で演習を受け、図画工作の資質・能力の向上を意図しているのに対して、図画工作科教育法は授業者の立場で講義を受け、図画工作科の授業を実践するための方法を学ぶことを意図している。図画工作は実技中心の内容論であり、図画工作科教育法は内容論に加えて子どもの実態・発達を踏まえて授業を組み立てる方法論である。図画工作が基礎となり、図画工作科教育法がその発展・応用という位置付けである。3年次前期の教育実習Ⅰでは、図画工作科教育法で学んだことを生かして教材研究・題材開発に取り組み、自ら模擬授業を実践する。教育実習Ⅰでの学びを生かして、3年次後期の教育実習Ⅱ・Ⅲでは小学校において児童を対象として実際に図画工作科の授業を行う。4年次前期の教員採用試験対策チャレンジセミナー図工では、これまでの学びの補充・深化・統合の場として理論・実技の両面から図画工作について学修する。教員採用試験対策ではあるが、あくまでも実践的指導力を身に付けるための一環である。4年次後期の教職実践演習では、これまでの学びに加えて小学校で開催される研究会や学習支援ボランティアへの参加などで学んできたことを生かして「学級通信の意義と作成」「教室環境づくり」（筆者担当は2講、平成27年度までの

内容) について学修し、卒業後の教育現場に生かすことができるように取り組むという流れである。各授業相互のつながりも大切であるが、授業と教育実習との往還も重視して取り組んでいる。

ステージ	各ステージにおけるテーマ	授業（演習・講義）など	教育実習
1年次	造形活動を通した図工的教養の育成	図画工作	
2年次	図画工作科教育・造形的発達の理解	図画工作科教育法，保育内容演習Ⅰ，造形表現演習	教育実習Ⅶ
3年次	図工における授業実践力の向上	教育実習Ⅰ	教育実習Ⅱ・Ⅲ
4年次	図工的教養・授業実践力の涵養・錬磨	教員採用試験対策チャレンジセミナー 図工，教職実践演習	

【表9：図工授業力を育成するための4段階】

3. 教育実習Ⅰとの円滑な接続を目指した図画工作科教育法における模擬授業指導

授業相互のつながり、授業と実習との間でのつながりを学生に意識させる取組は前述の通りであるが、模擬授業指導に関しては2年次後期の図画工作科教育法での実践が挙げられる。図画工作科教育法における教育実習Ⅰへの円滑な接続を目指した取組について具体的に述べる。

図画工作科教育法の1講「オリエンテーション」では、本授業のねらいを確認し、授業内容を紹介するとともに、過去の学生による模擬授業の映像も鑑賞させ、授業者としての自覚を促している。教育実習Ⅰの概要も併せて紹介し、教育実習とのつながりも意識させている。過去の学生による模擬授業の鑑賞は図画工作科教育法における学びの到達点の提示であると同時に、学生が目指すべき教師像、授業モデルの提示にもなっている。

2講「学習指導案，教材研究って何？」では、図画工作科の授業を組み立てるプロセス、図画工作科学習指導案の意味と書き方、教材研究・題材開発について学習する。教育実習での取組の例を挙げ、教育実習Ⅱ・Ⅲとのつながりも意識させている。授業を組み立てる際は、教材研究や児童の実態把握などの事前準備が大切であることを強調している。

8～13講「のぞいてみよう！図工の授業」では、図画工作科の学習内容である造形遊び、絵や立体、工作に表す、鑑賞について具体的に学ぶ。その中で、実際の授業映像を見ながら観察・分析し、その後筆者から補足・解説を行う。この学びを生かして、学生たちは自ら学習指導案・参考作品を作成する。

最終回の15講「頑張ろう！代表者模擬授業」でも、教育実習Ⅰとのつながりを意識させている。代表者による模擬授業では、学生から立候補を募り、45分間の図画工作科授業を実践させる。いわば、教育実習Ⅰで体験する代表者による模擬授業を先取りして実践し、学生に意欲を持たせている。図画工作科教育法での学びを総括し、3年次前期の教育実習Ⅰにつなげようとしている。

4. 教育実習Ⅰにおける図画工作科模擬授業指導

次に、教育実習Ⅰにおける図画工作科模擬授業指導の実際について述べる。

1講の全体会Ⅰでは、図画工作科の教材研究、および模擬授業のポイントとして次の6点を学生に伝えている。

- ① 実践化する題材の参考作品を作りながら、学習指導案を書こう。
- ② 参考作品は、必ず2点以上は作ろう。参考作品が1点のみであると、児童の思考と表現が画一化する可能性がある。
- ③ 参考作品の作成・提示においては、どのような作品（作品の質）を、何点くらい（作品の点数）作り、授業のどの段階で、どのような方法で見せるかが重要である。
- ④ 教材（題材）は、あまりに易し過ぎる、あまりに難し過ぎると子どもの学習意欲を殺いでしま

うので、児童の実態や発達段階からやや難しいくらいを目指そう。

⑤ 教科書題材でも、自分なりにアレンジをしよう。オリジナル題材でも、教科書や学習指導要領を参考にしよう。

⑥ 子どもが技法のポイントをつかめるよう、示範（演示）にもチャレンジしよう。

この他、1講では筆者の参考作品を複数学生に紹介することで、教材研究・題材開発の大切さを伝えている。筆者は、教材研究・題材開発の大切さを「7・1・2」というキーワードにして学生に提示している。「7・1・2」とは「授業の黄金率（比）」というものであり、筆者が担当している2年次後期「図画工作科教育法」のキーワードの1つでもある。教師が授業・保育を組み立てる際の、理想的な力の入れ方である。授業前7割・授業中1割・授業後2割という意味である。「7・1・2」とは、「人事を尽くして天命を待つ」と換言できる。他教科と同様に、図画工作科においても教材研究・題材開発の適否が、授業の成否に関わってくる。授業における課題・問題点をあらかじめ認識することができ、児童の発達段階に応じていかに対応するか、どのような手立てを講じるかが明確になる。指導者自身が、指導する題材を自ら体験し、試行することで、指導のポイントを掴むことができ、それが結果的にいい授業づくりに繋がるのである。

3～13講では、グループ別に模擬授業指導を行う。他教科領域と同様、模擬授業の2週間前には学習指導案を提出するよう学生に伝えている。通常、2～3回は指導案の添削を行い、少なくとも1回は模擬授業に関する打ち合わせをしている。余裕がない学生は模擬授業直前に1回添削しただけで授業に臨む場合もあるが、平成27年度に関しては見られなかった。空きコマを利用して、図工室に教材研究に来る学生も少なくない。筆者は模擬授業の練習にまで立ち会うことは少ないが、学生との時間が合えば、参考作品や教材・教具、使用する材料・用具についてのアドバイスなどを中心に指導している。

学生による模擬授業は、教師役の学生から学年と児童観を説明し、参加者間で共通理解するところから始まる。模擬授業が始まると、筆者も児童役を演じながら、ルーブリックを用いて評価を行う。表現や鑑賞などの活動を伴う図工では授業実践力（コミュニケーション能力など）も大切な要素であると考え、筆者も必ず参加するようにしている。模擬授業終了後、学習指導案を配付する。導入において、題材との新鮮な出会いをさせるためである。先入観を持たずに白紙の状態題材と出会うことによって、新鮮な感動や学習意欲を喚起することが図画工作科の場合に大切であるからである。模擬授業は、通常15～20分間で終了する。導入から始まり、展開の途中で終わる。時間的余裕があれば、終結を概略的に行う場合もある。模擬授業後の協議会は、授業者の反省、参加者との質疑応答、教員による講評、司会者によるまとめ、という流れで進めている。教員による講評では、筆者は①授業者の個性・持ち味について、②教材研究・模擬授業のよかった点、③教材研究・模擬授業の改善すべき点、④グループ全体に伝えたい図画工作科のポイント、という流れで進めている。

①授業者の個性・持ち味については、例えば「弾けるような明るさがあり、はきはきしたパンチの効いた先生」「2年次の模擬授業経験者でもあり、児童の興味・関心を高めることが得意な先生」「ICT活用も得意で、肯定的・受容的で丁寧な先生」などと評価することによって授業者の自己肯定感を高めるようにしている。多分に感覚的ではあるが、学生それぞれに異なる持ち味があり、それをさらに伸ばしたいと考えるからである。教師としての資質、コミュニケーション能力、授業実践力に関わる部分である。ルーブリックでは表現技術（評価方法：発問、指示、説明、板書）に関わる部分であろう。筆者は、ルーブリックに入っていない要素を補う資料として、金舛俊乍（元本学教授）の5箇条「これで一本をとろう！」を併用している。「一、発問・指示・話し方で一本とろう！ 一、子どもとのコミュニケーションで一本とろう！ 一、丁寧な板書で一本とろう！ 一、子どもを認める評価で一本とろう！ 一、豊かな表情・態度で一本とろう！」の5箇条であり、主に教員採用試験対策チャレンジセミナーの二次試験対策・模擬授業で用いられてきたものである。学生に5箇条のコピーを提示しながら、評価・助言をしている。②③については、教師役の学生によって用意された参考作品や教材・

教具、示範（演示）などをもとに、事前の教材研究や模擬授業の成果と課題について筆者なりに評価・助言する。ルーブリックでは教材分析力、授業構想力、教材開発力、授業展開力に関わる部分である。「7・1・2」や図工授業力などのキーワードを活用しながら、学生の授業に対して評価・助言を行う。④については、教育実習Ⅱ・Ⅲなどの実践に生かすため、グループ全体に対しておさえていきたいポイントを述べて、学びを共有して締め括り、次の模擬授業に移る。

【資料9・10：教員用の模擬授業記録票、学生用の模擬授業自己評価票（図画工作科の場合）】

16講の全体会Ⅲでは、図画工作科模擬授業の総括として例年おおよそ次の点を学生に対して述べている。平成27年度も同様であった。

- ① 模擬授業終了後、児童役から「もっとやりたい」「続きがしたい」という声があったら成功である。
 - ② 授業者の差というよりは、むしろ教材研究にかけた時間・手間の差が、模擬授業の成否の差に影響した。
 - ③ 「図工が苦手だ」「図工が嫌いだ」というレベルに留まるのではなく、「苦手だからこういう工夫をしよう」というように前向きに取り組んで欲しい。
 - ④ 参考作品は、見栄えのするものにすればいいというわけではなく、たとえ図工が苦手でも精一杯取り組めば必ずねらいは児童に伝わる。今後の取組のためにも、参考作品は必ず保管して欲しい。
 - ⑤ 教育実習Ⅱ・Ⅲでは、担任の先生から引き継ぐ題材でも、自分でも必ず参考作品の一つは作ろう。平成27年度の自己評価シートより、図画工作科模擬授業に関する記述を抽出すると以下ようになった。
- ①（Eグループ）指導案の作成は、1回目ではなかなか作ることができなかったが、図工と道徳は自分のやりたい授業を作ることができた。（1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み）
 - ②（Hグループ）事前準備は板書などに力は入れていましたが、道徳、算数の教材研究は足りなかったと思いました。最後の図工では、教材研究も自分が納得するまでできたと思います。（1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み）
 - ③（Hグループ）算数では掲示物やPowerPoint、道徳では掲示物、図工では掲示物や参考作品を作りました。3教科領域とも模擬授業をして、改善していきました。（1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み）

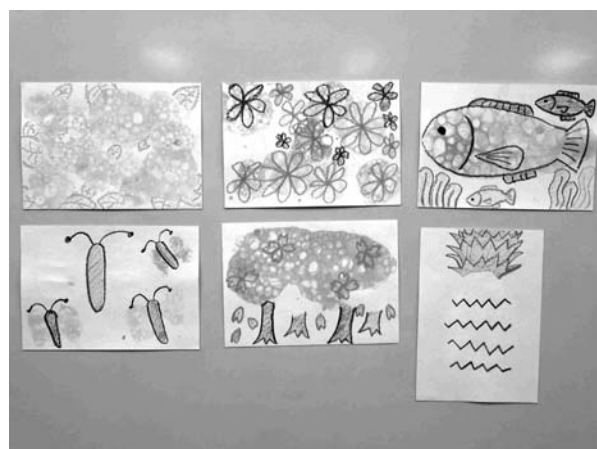
- ④ (Hグループ) 道徳や算数, 図工で使う掲示するものは準備できたし, 図工での教材研究の大切さが分かった。しかし, 資料の読み込みがよくできていないところがあった。(1. 模擬授業に向けた事前準備・教材研究等の取り組み)
- ⑤ (Eグループ) 1回目では, 授業の流れが頭に入っていないと何回もメモを見てしまった。図工と道徳は, テンポよく進めることができたと思う。(2. 指導案の作成)
- ⑥ (Hグループ) 算数や図工では, たくさんのアドバイスをいただき, 安心することができました。(5. 担当教員の指導)
- ⑦ (Fグループ) 初めての模擬授業ということで, 1回目の図工がすごく印象に残っています。初めて実際の授業をしてみて, 自分が授業の時にどんな雰囲気なのか, 児童に対してどんな風に接するかがわかりました。すごく焦って授業展開をしてしまうので, 児童とのやりとりの時に児童の反応を待つ「間」をしっかりととることを課題として, これからの実習も意識して取り組んでいきたいと思います。(6. 全体を振り返って)
- ⑧ (Fグループ) 今回私は図工と社会, 道徳の模擬授業を行いました。私はこの教育実習 I の前に, 図工と体育, 理科の模擬授業をしたことがありました。他の人よりは経験をしているし, 図工は模擬をしたことがあったので自信があったのですが, 実際にやってみるとボロボロでした。今後, 模擬をすることがあれば, 事前準備は後悔しないように頑張りたいです。(6. 全体を振り返って)
- ⑨ (Hグループ) 全体を振り返って, 私は道徳・図工・算数の模擬授業をしたのですが, どれもとても印象に残る模擬授業でした。それぞれの教科領域で自分への課題も沢山出てきたし, 皆の授業を受けて参考にしたい点も沢山出てきて, これからの教育実習で必ず生かしていこうと思います。ただ, 音楽・国語・体育については授業をしていないので, 夏休み中に皆と集まって模擬授業をするのと, 45分の授業も必ずしておこうと思います。この教育実習 I の授業で得たことが無駄にならないように必ずつなげていきたいです。教育実習頑張ります。(6. 全体を振り返って)
- 以上の回答についての詳細を知るため, 記述した学生の中から3人にインタビューを試みた。

②と⑨は同一学生である。この学生は教育実習 I では入念に教材研究を行い, 模擬授業に取り組んだ。第1学年「キラキラシャボンで～どんな絵ができるかな?」(絵に表す)という題材であった(アートの題材)¹¹⁾。空きコマを活用して図工室に訪れ, 時間をかけて教材を試行していた。グループ内で題材が重複した学生もいたが, とともに教材研究を行うことで題材に対する理解を深めていた。授業を行う本時をずらすなどの工夫をして, 互いに独自性を出そうとしていた。この学生は, 異なるパターンの参考作品を複数用意するだけでなく, 導入においてiPadを活用して「クイズ・なににみえるかな?」を実施した。「7・1・2」を実践していたといえる。ICTの活用だけでなく, 示範(演示)を通して自ら技法を実践して, 児童役の学生にやり方を見せていた。教材開発力も高かったが, 常に笑顔で授業を進めることができおり, 表現技術の点においても優れていた。この学生は, 後期の教育実習Ⅱ・Ⅲでも第1学年に配属され, 図工を3時間実践した。第1学年「ごちそうパーティーをはじめよう!」(立体に表す)という題材であった(アートの題材)¹²⁾。導入においてiPadを活用して「クイズ・なんのごちそうでしょうか?」を実施した。クイズを行い, 発表する機会を作り, 児童の学習意欲を高めることができていた。参考作品を3パターン提示して学習への見通しを持たせるとともに, 活動の手順なども児童にわかりやすく示していた。教育実習 I での学びが生かされたといえる。しかし, 3時間目の鑑賞においては課題が顕著であった。めあてが「ごちそうをみせあおう」というものであり, 内容が浅いものとなった。用意したプリントも, 隣の児童の名前と, 作ったごちそうのメニューを記述するだけであり, 感想を書く欄が用意されていなかった。クラス全体で鑑賞をする場面でも, 指示が曖昧であり, 漠然と作品を見ることに終始してしまった。例えば, 「クラスで一番おいしそうなおごちそうは誰の作品かな?」といった明確な目的や指針があれば, 児童の動きも変わったであろうと本人は省察していた。教育実習 I では導入・展開を中心に学んでいたため, 作品の相互鑑賞などといった完成後の取組については理解が浅かったといえる。教育実習 I の模擬授業後の協議会においても,

終結について取り上げる必要があるだろう。教育実習Ⅰだけでなく、図画工作科教育法の授業内容にも関わる筆者自身の反省点でもある。この学生は、平成27年8月に実施されたオープンキャンパスにおいて参加高校生を対象とした20分程度の模擬授業（理科）を経験しているものの、夏期休業中に45分の模擬授業を実践することができなかったとも述べており、終結に対する慣れが不足していたとも考えられよう。この学生は、図工的教養と授業実践力の両方とも高いと筆者は評価している。

⑦の学生は、教育実習Ⅰでは第2学年「ぼくの名前はパナチョラ」（立体に表す）というオリジナル題材に挑戦している（アートのな題材）。導入では、チャウダ星からやって来たパナチョラという未知の宇宙生物からの手紙を拾ったという設定で、児童役の学生の学習意欲をつかむことに成功している。参考作品も、異なったパターンを2種用意するなど、「7・1・2」を実践していたといえる。この授業を通して、児童役の学生がどのように反応を示すのか、自分がどのように指導をするのかが掴めたことにより、この模擬授業が印象に残ったのだという。オリジナル題材であったこともあり、自分にしかできない授業を作り上げることができたという点で満足していると述べていた。しかし、教壇に立つと話し過ぎてしまう傾向があることも自覚できた。導入が長くなってしまうという気付きがあった。この学生は、平成27年6月に実施されたオープンキャンパスにおいて参加高校生を対象とした模擬授業において同題材を実践することができたが、後期の教育実習Ⅱ・Ⅲでは実習校の事情により2時間（国語）しか授業実習を行うことができなかった。実習校の先生方からは、まさに体当たりの授業であり、一生懸命に授業に取り組む姿は必ず子どもに伝わるから、今後も全力で真摯に取り組んで欲しいとの評価をいただいた。授業実数の時間数は少なかったが、教育実習Ⅰでの学びは生きていたといえるだろう。この学生についても、図工的教養と授業実践力のいずれも高いと評価できる。

⑧の学生は、図画工作科教育法において45分の代表者模擬授業を経験している。第1学年「うつつてあそぼう ～めざせ、ぺったんめいじん～」(絵に表す・造形遊び)という野菜を用いたスタンプの題材であり、児童役の学生からも好評であった（アートのな題材）¹³⁾。この他、2年次で模擬授業を複数経験しており、普段も子どもを対象としたスポーツ指導をしている学生である。教育実習Ⅰでは、はじめて15分間の模擬授業をすることになった。導入と展開の冒頭で終わることになり、かえってやりにくかったと述べている。時間配分に問題があったのだろう。教育実習Ⅱ・Ⅲでは、教育実習Ⅰでの学びを生かすことができたと述べていたが、実際の児童を対象にする場合は、発問や板書計画などかなり綿密に準備しておく必要があったとも述べており、そこが学生を対象にした模擬授業の違いであったという。そこには、細かな時間配分も含まれる。この点については、今後の筆者の指導にも生かしていきたいと考える。この学生は図工的教養も低くはないが、子どもを指導した経験が豊富なこともあり、授業実践力の方がより高いと筆者は評価している。



【資料11・12：教育実習Ⅰにおける図画工作科の模擬授業】

平成27年度の教育実習Ⅱ・Ⅲ終了後の3年生の教育実習報告書から、図画工作科の授業実習を行っ

た学生を抽出し、図画工作科教育法や教育実習Ⅰにおける佐伯の実践について検討・考察する手がかりとする。実習を行った73人のうち、図画工作科の授業実習を行ったのは22人、のべ40時間（最多の学生で4時間）であった。以下、参考になるとと思われる事例を取り上げ、学生にインタビューをした。

教育実習Ⅱ・Ⅲにおいて図工の授業を4時間実践した学生にインタビューを行った。この学生は、教育実習Ⅰでは第2学年「ストローでこんにちは」（工作に表す）を実践している（デザイン的な題材）¹⁴⁾。参考作品も複数用意し、真摯に取り組んだ。教育実習Ⅱ・Ⅲでは、第1学年「なにがでてくるかな!？」（工作に表す）を導入から評価までの全授業を実践した（デザイン的な題材）¹⁵⁾。これは指導担当教諭（クラス担任）があらかじめ用意していたセット教材を使用したものである。セット教材をいくつか分けていただき、教材研究に取り組んだ。装飾を施していない仕組みだけの参考作品を3パターン、装飾を施して完成させた参考作品を1点作成した。この学生は、セット教材だけでなく、空き箱を使っても同様の作品を作ることができることを児童に対して自主的に伝えている。結果、この学生に対して距離を取っていた児童が、空き箱を使ってもう1作品自主的に家庭で作ったことを実習最終日に伝えてくれて、とても嬉しかったと述べていた。他の児童も、題材に対する反応が総じて好意的であり、とても面白かったという感想が多かったという。図画工作科教育法や教育実習Ⅰでの学びが生きた例であると考え。この学生は、授業実践力よりも、図工的教養の方が高いと筆者は評価している。図工的教養が、授業実践力を補ったととらえている。今回のインタビューを通して、図画工作科の授業においてセット教材を使用している学校は複数存在していることがわかった。図画工作科教育法や教育実習Ⅰにおいても、セット教材だけに頼ることなく自分なりの工夫も必ず取り入れることを、これまで以上に強調する必要があるだろう。

図画工作科模擬授業指導の成果と課題をまとめると、次のようになる。

- ① 図画工作科教育法の代表模擬授業とのつながりもあり、参考作品が1つだけという学生は少なくなり、教材研究にも時間・手間をかける学生が増えている。
- ② 1人につき1台iPadを所有している学年であるため、ICTを活用した模擬授業が増えてきており、視覚的・効果的に伝えやすくなり、学習意欲の喚起に役立っている。
- ③ 題材が同グループで重複することもあるが、ともに教材研究をする中で、学生なりの工夫で独自性を打ち出している。
- ④ 題材との出会いの演出や示範（演示）に挑戦する学生も少なくないが、どうしても導入に時間がかかるのが現状である。
- ⑤ 模擬授業が15分で終わることもあり、「めあて」は立てられるが、「まとめ」との関連性が弱い学生、完成作品の相互鑑賞など題材の終結で行う活動に慣れていない学生も認められた。（佐伯）

おわりに

以上、教育実習指導全体における教育実習Ⅰの位置付けを明らかにするとともに、筆者が専門とする図画工作科における模擬授業指導の実際について述べ、成果と課題についての考察を行った。教育実習Ⅰにおける模擬授業を通して、大きく分けて学生には4通りの傾向があることに気付いた。1つ目は、図工的教養が低く、授業実践力が高い学生である。コミュニケーション能力が高く、児童とのやりとりはうまくこなすが、教材研究が浅い学生である。2つ目は、図工的教養が高く、授業実践力が低い学生である。教材研究は深い、児童とのコミュニケーションが得意でない学生である。3つ目は、図工的教養と授業実践力ともに高い学生である。4つ目は、図工的教養と授業実践力ともに低い学生である。図工的教養と授業実践力ともに高いことが理想であるが、養成－採用－研修の長いスパンでとらえて各自の不足分を補い続けていく必要があるだろう。しかし、在学中においても図工的

教養と授業実践力の育成は不可欠であるため、今回主に取り上げた学生については、4年次の教員採用試験対策チャレンジセミナー図工、教職実践演習などで力を付けていくとともに、授業外のところでも図工室において美術展のポスター、チラシ、ハガキなどを常設することによって図工的教養を高める間接的な働き掛けも続けていきたい。授業実践力については、教員採用試験対策チャレンジセミナーの集団討論、面接指導、模擬授業などにおいて育成を目指していきたい。上記の4例は、模擬授業における児童役の学生にも言えることである。筆者の模擬授業指導では、4例を想定した児童観を学生に考えさせるまでには至っておらず、学習集団の生かし方については今後の課題と言えるだろう。例えば、図工が好きで得意である児童、図工が嫌いである児童、表現したい思いはあるが技能が伴わない児童、技能はあるが表現したい思いが伴わない児童といった4例を児童観に記述させ、それに対する手立てを指導観に反映させる必要があるだろう。さらに個別的な課題を抱えた児童も想定しておけば理想的であろう。

今回のインタビュー対象者は少数であった。今後は調査対象を広げ、教育実習との往還を考慮した図画工作科における模擬授業指導の評価を今後も継続していき、図工授業力と自らの指導のあり方についてさらに検討していきたい。(佐伯)

註、引用・参考文献

- 1) 柴田義松『批判的思考力を育てる』日本標準, 2006年
- 2) 佐伯育郎・徳本達夫「教育実習指導の現状と課題～教科専門(図画工作)・教職専門(教育史等)の観点から～」(『広島文教女子大学 教職センター年報 2013年創刊号』広島文教女子大学教職センター, 2013年所収, 39～40ページ)
- 3) 野口芳宏「模擬授業を使った授業トレーニングとは？」(上條晴夫責任編集『教師教育 いま、考えるべき教師の成長とは。』さくら社, 2015年, 66ページ)野口は、「『一時間の模擬授業』などというのは『授業トレーニング』には向かない。検討すべき要素が雑多になって協議内容が分散し、成果が見えにくくなる。だが、5分とか、10分では、あまりにせせこましく、現実的ではない。授業というものは、教師からの働きかけと、それに応える子どもの反応との相乗、相関によって進行する営みである。子どもを問題にしない一方的な教師の伝達や説明なら5分、10分でもよからうがそれは現実的ではない。15分か20分というところが標準的であろう。30分では長すぎる。」と述べている。筆者も同感である。
- 4) 佐伯育郎・徳本達夫「教育実習指導の現状と課題(Ⅱ)～教育実習を中心に～」(『広島文教女子大学 教職センター年報 2014年第2号』広島文教女子大学教職センター, 2014年所収, 11～24ページ)
- 5) 今崎浩「大学におけるルーブリック評価導入・活用の成果と課題」(『広島文教女子大学 高等教育研究 2015年創刊号』広島文教女子大学高等教育センター, 2015年所収, 26ページ)
- 6) 日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのか -教科の本質を踏まえた授業づくり-』文溪堂, 2015年, 13ページ。
- 7) 前傾書6) 30ページ。
- 8) 前傾書6) 31ページ。
- 9) 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』文部科学省, 2008年。平成20年度版・小学校学習指導要領図画工作科では、A表現(2)「絵や立体, 工作に表す」として一括りにされている。同書では、「『絵や立体』とは、絵の具などで平面に表したり、粘土などで立体に表したりすることであり、ともに自分の感じたことや思ったことなどを表すという点で共通している。一方、『工作』とは、意図や用途がある程度明確で、生活を楽しくしたり伝え合ったりするものなどを表すことである。ただ、絵に立体的なことを加えたり、工作で表面に絵をかいたりするなど、表す過程では関連し合うことが多い。そこで、表したいことから学習が広がることを重視し『絵や立体, 工作に表す』とまとめて示している。」と説明している(16ページ)。筆者は、関連し合うこと自体は否定しないが、たとえその対象が大人に比べて未分化な小学生であろうと、両者の意味や意義を混同しないように教師は指導すべきであると考えている。
- 10) 今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店, 2012年。今津は「『資質』とは生まれつきの性質で得手不得手や人柄などと関わり、あまり変化することのない個人の性質である。それに対して、『能力』とは教育によって成長して変化する知識・技術を意味する。教職を継続できるかどうかは教師の資質と能力とに関わる。」「つまり、『資質』とは言っても、それはまったくの不変ではなくて、周囲の援助によってある程度の広がりや豊かさを得ると考えることができる。」(26ページ)と述べている。筆者も、今津の考えに同意する。
- 11) 平成27年度版『ずがこうさく1・2下 みんなおいでよ』開隆堂株式会社, 2014年, 25ページ。

- 12) 平成27年度版『たのしいなおもしろいな ずがこうさく1・2上』日本文教出版, 2014年, 28～29ページ。
- 13) 平成27年度版『ずがこうさく1・2上 わくわくするね』開隆堂株式会社, 2014年, 28～29ページ。題材名の副題は, 学生が独自に考えて追加したものである。
- 14) 平成27年度版『たのしいなおもしろいな ずがこうさく1・2下』日本文教出版, 2014年, 42～43ページ。
- 15) 平成27年度版『たのしいなおもしろいな ずがこうさく1・2上』日本文教出版, 2014年, 46～47ページ。

付記：小文は, 中国四国教育学会（2015.11.14岡山大学）において口頭発表した共同研究を土台にしている。当日, 学会員との質疑応答で多くを学ぶことができた。謝意を表したい。